

ワークショップを中心とした実践的教育体系構築の試み

生活文化デザイン学科 巖 爽

はじめに

「ゆとり世代」といわれている現在の大学生に対して、大学教育の役割も変化してきている。専門知識の伝授だけではなく、主体的に物事を取り組むなど学びの姿勢の育成も大学教育の重要な役割の一つとなりつつある。特に建築・生活デザイン業界では実践力、即戦力のある人材を求めているものの、教育現場においては従来の専門的な教育に止まっている現状がある。

一方、大学施設の改装、改修は教員レベルで議論され、利用者である学生が関わることができない。また、学生の成果を発表する場であるべき学科の年間行事（オープンキャンパス、学祭、学科展など）においても、教員中心に企画・運営しており、学生が関わることにに対するモチベーションが低い。

このような現状において、学生が中心となって主体的に関わることができるワークショップ（以下、WS）活動などを通して、モチベーションを高め、実践力を鍛え、日々学んだ知識を還元する場の創成が教育プログラムの一環として位置付けることが望まれ、本教育研究プログラムのねらいである。

これまで、授業の一環として建築・インテリア系の学生と教職・学芸員課程を履修している学生のコラボレーションによる展示空間づくりを試みてきた（2007年度～2009年度私学経常経費補助金：教育・学習方法等改善支援課題）。今回の取り組みはカリキュラムの補足として位置づけ、学生が自ら発案し、自ら取り込んでいくワークショップ活動を通して、学生の自主性と活動能力を高めることを目的としている。また、学科の広報物のデザインを実際に携わることをデザイン教育の一環として、「美」や「デザイン」に対する意識を高めることも目的の一つで

ある。

本教育研究の特色・独創点として、授業の枠を超え、教員はアドバイザーとして最低限に関わり、学生自らファシリテーターを務め、学科全学生の意見をまとめ、ワークショップ形式で発案、企画、設計、実施に至るまで主体的に取り組む点である。

2. 学生の自主活動の現状と今回の取り組みの方針

生活文化学科の設立とともに、全学科の学生と教職員が会員となる「生活文化学会」が立ち上げられた。生活文化学会の目的は学年、教員・学生の関係、カリキュラムを超え、学会構成員が共に発案、企画する課外活動を通して授業で得られない実践的体験を共有することである。これまで、学年毎に「生活文化学会委員」を学年代表として2名選出し、8名の委員と担当教員（1名）、副手（1名）中心に年間企画を立て、活動を進めてきた。しかし、学年代表が学年全員の要望を反映することが難しく、学会の活動が学生の中で十分浸透していないこともあり、全学生を巻き込むことができなかった。会員が多いこと、会員である学生の関心分野が多岐にわたっていること、入学と同時に自動的に「生活文化学会」の会員になっていることで学会の意味や学会員としての役割を知らない学生も多いことなどによって、教員主導の活動になってしまい、活動自体も年に一回の県内研修旅行と学科展の手伝いなど、消沈状態に陥っている。

このような経験を踏まえ、今回は少人数の有志学生から始めていこうとした。活動人数、活動の拡大は学生に任せることとして、量とスピードより、学生のペースでゆっくりであるが着実に成長させていくことを活動の方針とした。

3. 「ワークショップサポート会議」の立ち上げ

本課題研究は有志学生の募集から始まった。まずは仙台建築・都市学生会議に関わっている学生に声を掛けたところ、学生達も他大学のような学生有志組織を作りたいという思いがあることを知った。

さらに何回かの話し合いを経て、「生活文化デザイン学科の学生有志団体を設立、それを支える」ことで、4年生2人、2年生2人と共にこの課題研究の第一歩を踏み出した。

立ち上げ当初は2週間一回のペースでミーティングを重ね、活動は学生が主体的に取り組み、教員はアドバイザーの立場で指導に当たる原則が定められた。ワークショップサポート会議の名前（建築学生有志団体 アマリリス）の決定に伴い、参加学生も徐々に増え、夏休み前には4年生2名、2年生10名になり、夏休み明けにはさらに1年生10名が加わり、現在のメンバーの24名になった。学生のミーティングは毎週月曜の昼休みに行い、必ず議事録を取るようにしている（資料①）。

当初「空間作りWS」、「グラフィックデザインWS」、「各種セミナー」が計画されていたが、学生達と話し合った結果、初年度はスキルの向上に重きを置きたいため、グラフィックデザインWSを中心とした下記の年間活動計画が確定した。

- ① 学科広報関係：学生目線からの学科紹介パンフレットの作成（7月～10月）
- ② デザイン関係：アマリリスのロゴ募集（6月～7月）、学科展ポスターコンペ（11月）
- ③ スキルアップの講習会：他大学の学生によるグラフィックデザイン系ソフトの講習会を行う
(後期)
- ④ 講演会：有名建築家をお招きした講演会を開く
(後期)

- ⑤ 就職支援関係：OGとの座談会を開く（後期）

4. 活動の実施報告

4-1 学生目線からの学科パンフレット制作

まず、現在の大学要覧をはじめとして、学科自作の学科紹介チラシを含めた見直しを行った。高校生や大学生の視点から、「よい点」、「分かりにくい点」、「関心度の低いインフォメーション」、「足りないインフォメーション」など、内容についての話し合いを行い、色遣いやレイアウトの工夫などデザイン面のスタディも繰り返した。現状分析によって課題が整理された段階で、学生による新しい学科パンフレットの制作が始まった。制作工程は以下に挙げる。

- (1) 教員へのインタビュー内容（質問項目）の検討（資料②）
- (2) メールを使って、教員へのアポイントメントを取り、インタビュー目的の説明を行う（資料③）
- (3) インタビュー担当+撮影担当+記録担当がチームとなり、順次教員へのインタビューを実習する
- (4) テープ起こし、インタビューのデータ化作業（1年生と共に）
- (5) ページレイアウトの確定
- (6) (4)と(5)に基づき、各研究室のページ作成（各教員に校正していただく）
- (7) 学科共通ページ内容の吟味、レイアウト作成
- (8) 最終調整
- (9) 印刷（紙、色の調整）
- (10) 出来上がり

このような工程のなかで、全てのステップにおい

て、教員への印旛シユール項目が絞れない、アポイントメントのメールがうまく書けない、忙しい教員のアポがなかなか取れないなど、予想以上に時間が掛かった。もっとも大変だった作業は1時間以上及ぶインタビュー内容を1ページに絞ることだった。もっとも楽しかった作業はページレイアウトと色デザインだった。最終的に、学生の目線からの分かりやすい学科パンフレットが出来上がり、今後の広報活動等に生かしていくことになる。



学科パンフレット・表紙

4-2. アマリリスのロゴコンペ

「アマリリス」のアイデンティティを学生の中でアピールし、より多くの学生が関われるため、ロゴコンペを行った。多くの案から、4年生武田恵佳さんの案（以下）が選ばれた。



アマリリスのゴロ・デザイン：生活文化学科4年武田恵佳

4-3. 学科展ポスター（はがき）コンペ

学科改組以来、一年間教育・研究の成果を社会に還元する目的で電力ビルグリーンプラザにて、「生活文化学科展」が行われている。市民やOGなどが多く訪れているものの、在学生の関心度が低い現実がある。今年はポスターやはがきのデザインから学生に関わってもらうことで、在学生の関心を高めたいと考えた。アマリリスによって、コンペの案内が張られ、約1ヶ月の募集期間を設けた。最終的に、3つの応募案が上がり、1年の小澤朱里さんの案が選ばれ、修正を重ねた上、ポスターとして印刷され、各高校に送付され、学内や仙台市内の各箇所に掲示された。



学科展ポスター・デザイン：生活文化デザイン学科1年小澤朱里

以上の企画は講師（OG）の日程が合わず、なかなか実施できなかった。3月中に実施予定である。

5. まとめ

今回の取り組みはまだ始まったばかりであるが、学生を中心としたワークショップ活動のプラットフォームが既に出来上がってきている。関わった学生にとって、授業で学んだことが実際に実現されたことで達成感を味わうことが出来、大きな自信に繋がった。

4-4. 他大学との連携による活動

在仙建築系大学（東北大学、東北工業大学、宮城大学、東北芸術工業大学、宮城学院女子大学）による仙台建築・都市学生会議に、アマリリスのメンバーも参加しており、会議のもっとも大きなイベント「卒業設計日本一決定戦」(<http://gakuseikaigi.com/nihon1/11/about.html>)の企画・運営に携わっている。2年生メンバーは各部門（事務局、デザイン局、会計局、会場局、審査局）の局長を始めとして、中心的な存在になりつつ、大いなる活躍を見せている。

4-5. 年度内に実施予定の企画

- ・イラストレーター、フォトショップ講習会
- ・OGとの座談会

また、本教育研究プログラムのもっとも大きなねらいとして掲げられた目標、受け身で勉強する姿勢ではなく、学科の運営に積極的に関わることで自ら「学び」の姿勢を養い、リーダーシップを発揮し、実践力・即戦力のある学生育成プロセスが徐々に定着してきているといえる。

WS活動は授業の枠、学年の枠を超えた上級生、下級生の交流の活性化、互いに刺激合う関係の形成に大きな効果があることも検証された。

6. 今後の課題

今後、「建築学生有志団体アマリリス」の継続、WSの恒常化によって、全学科の学生を牽引し、学科活動の活性化が期待できるうえで、学生生活の充実

度、満足度を高めることを次年度の課題としたい。

建築環境学専攻の発展
Development of Architectural Environmental Engineering

建築環境学専攻は、建築学と工学の融合により、人と環境との関係を科学的に理解し、快適な居住環境を創出することを目的としています。近年、省エネルギーや環境負荷低減の観点から、建築環境学はますます重要性を増しています。本専攻では、基礎的な学問的知識の習得に加え、実践的な研究能力の育成を重視し、卒業生が社会で活躍できる人材を育てています。



過去の卒業論文・設計テーマ

卒業論文
・天井裏等の内部空間からの化学物質吸入を考慮したシックハウス対策
・断熱気密住宅の室内気象の特性に関する研究
・住居家のトロピカルファウンテンに関する研究
・職工優先住宅の室内環境に関する研究

卒業設計
・シックハウス患者のためのエコレゾ
・まちなか居住の再構築
——青森県社通リ・夢道原住計画——

研究室イベント

- ゼミ旅行(京都府・北海道エコレッジつくば研究所)
- 市民の省エネルギー改修工事(大工仕事の体験)の参加
- シックハウス診断士試験勉強会
- 中学生に向けた職場教育の研究授業
- 共同調査研究(北海道大学、青森県立大学、秋田県立大学、東北大学など)

こんな学生を求めます

○ 幅広い学問的知識と文字と数字と両方使える人
林 基哉は、建築学と工学の両方からアプローチし、人と環境との関係を科学的に理解し、快適な居住環境を創出することを目的としています。そのため、幅広い学問的知識と文字と数字と両方使える人を求めます。

○ 社会の課題を解いていく好奇心
社会の課題を解いていく好奇心を持って、積極的に学問に取り組んでいく人を求めます。

○ 実践的な研究能力を身につけた人
基礎的な学問的知識の習得に加え、実践的な研究能力を身につけた人を求めます。

先生のプロフィール

○ 建築環境学専攻の主任教授
林 基哉は、建築環境学専攻の主任教授として、幅広い学問的知識と文字と数字と両方使える人を求め、実践的な研究能力を身につけた人を育てています。

○ 幅広い学問的知識と文字と数字と両方使える人
林 基哉は、建築学と工学の両方からアプローチし、人と環境との関係を科学的に理解し、快適な居住環境を創出することを目的としています。そのため、幅広い学問的知識と文字と数字と両方使える人を求めます。

建築環境研究室 林 基哉 教授
Lab. of Architectural Environmental Engineering Professor Motoya HAYASHI



学科パンフレット・研究室紹介ページ

〇〇先生

宮城学院女子大学生生活文化デザイン学科 2年の〇〇〇〇と申します。

〇〇先生からお話を伺っているかと思いますが、学科の年報の件でご連絡いたしました。

私達は 2 年生を中心とするメンバーで、〇〇先生と 4 年生の先輩方のご指導の下、『amaryllis』というサークルを立ち上げ、学科を自分たちの力でより向上させていこうと活動を始めました。

現在、初めての活動として学科の年報作成に取り組んでおります。

そこで、研究室紹介のページを作成するにあたり、是非とも先生にインタビューさせていただきたいと考えております。よろしければ、先生のご都合の良い日を教えていただき、ゼミ室に伺いたいと思っておりますが、いかがでしょうか。

今月中にご都合の良いお日にちについてご連絡いただければ幸いです。お手数お掛けしますが、宜しくお願いいたします。

--

〇〇〇〇

宮城学院女子大学生生活文化デザイン学科 2 年

090-6458-1613